

(海外・国内) 出張報告書 (学生用)

2016 年 4 月 5 日提出

氏名	豊間根 耕地
所属	感染・免疫部門
学年	博士課程 2 年
出張先	University College Dublin, Dublin, Ireland
出張期間	2016/3/12 - 2016/3/20
目的	UCD での講義受講

活動内容 (2,000 字程度、活動内容が判る様な写真や図表を加えて下さい)

本出張の目的は University College Dublin (UCD) にて UCD、Trinity College Dublin (TCD)、および Dublin City University の 3 大学の PhD コースの学生を対象に毎年開講されている、Advances in Infection Biology に参加することである。この講義の主催は昨年 SaSSOH にて講演していただいた Prof. Gordon である。今回は初の試みであることもあって、私を含めた学生 10 名と教員 5 名が参加となった。本出張は概ね以下の予定に従った。

3 月 12 日	土	現地到着
3 月 13 日	日	UCD の学生との交流
3 月 14-16 日	月-水	Advances in Infection Biology 受講
3 月 17 日	木	聖パトリックデー (祝日)
3 月 18 日	金	キャンパスツアー
3 月 19 日	土	現地出発 (3/20 帰国)

3 月 12 日の現地到着時にまず驚いたのは空港の案内板を始め、至る所にアイルランド語の表記がなされている点である。アイルランドはスコットランドと共にケルト文化の影響を残す国である。アイルランド語とスコットランドに残るスコットランド・ゲール語は、いずれもケルト民族の言語であるゲール語の派生言語である。以前私がエジンバラ大学視察のために訪れたスコットランドではスコットランド・ゲール語の表記を目にする事はまずなく、ゲール語の話者数も極めて限られていた。一方で、アイルランドでは国を挙げてアイルランド語の保存が進められている。また、学校教育においてアイルランド語の教育が実施されており、至る所でアイルランド語の表記を目にした。アイルランドが 1916 年の武装蜂起をきっかけに独立した事と、スコットランドが 2014 年の国民選挙で連合王国からの独立を否決した事も含め、両国は類似した文化的背景を持ちながら、同時に非常に対称的でもあると感じた。

到着の翌日、3月13日にはUCDの大学院生である Louise と Alicia、同じく UCD の PhD コースを修了し現在ポスドクとして働く Andrés の 3 人と共に市内視察へ向かった。Louise と Andrés は昨年北大を訪問しており、今回の参加者のうち、自分を含めた 3 名はその際に交流を行ったため、2 人と 1 年ぶりの再会となった。

3月14日から16日の3日間は本出張の主たる目的である *Advances in Infection Biology* を受講した。この講義は PhD コースの学生が将来的に外部資金を調達する事を目的として、様々な感染症に関してその問題点と解決策、研究手法について情報を得て、その情報と自らの研究テーマを統合して模擬的な助成金申請を行うという形式で進められる。講義を通して触れられるテーマは、細菌感染症である結核のトランスクリプトーム解析からアルボウイルスと宿主免疫系の相互作用、さらには動物倫理と非常に多岐に渡っている。そのため、様々なフィールド、手法、視点に関する情報を、短期間に滝のように浴びる事ができた。個人的には私自身の研究テーマと密接な関係にある枯草菌の転写因子に関するテーマが一番興味深く感じたが、自分のテーマと直接関連しない他の講義についても、自分の視点をより広くするために有意義なものであったように思う。印象的だったのは現地学生の講義に対する姿勢だ。講義でも講演会でも会議でもそうだが、自分の知る限り日本の大学では講義の後に質問をするのは特定の学生に限られ、他の大多数はほとんど発言しない。対して、UCD での講義では一部に発言のない学生がいるものの、ほとんどの学生が3日間の講義の間、何かしらの形で質問や発言を行っていた。文化の違いによる一面もあるとは思いますが、そういった積極的な姿勢は日本でももっとあっていいのでは無かろうかと感じる。

祝日を挟んだ3月18日は元々キャンパスツアーに連れて行って頂く予定だったが、中島先生の提案により、急遽北大側の学生数名と、UCD および TCD の学生数名が各自の研究内容について発表する事となった。自分の発表はまだまだ質、量ともに充実しているとは言えず、今後の努力の必要性を感じた。研究内容の発表を行った後は、UCD の動物病院を案内して頂いた。エジンバラ大学でも同様であったが、UCD の動物病院は日本の大学付属動物病院と違い、馬の診療施設が充実している。また、比較的規模が小さいためか、CT など一部の施設を大動物の診療と小動物の診療で共有しているのが興味深かった。そもそも日本の大学だと大動物の CT を撮る事がないが、仮に大動物と小動物、両方を診療する施設でも CT を共有するという発想には中々至らないと思う。

今回の出張は講義のみならず講義外の活動も非常に有意義なものであった。今後、自分の研究をはじめとした活動に活かしたい。



図 1 UCD 構内の風景。雨の多いアイルランドにしては珍しく、滞在中は全く雨が降らないなど非常に天候に恵まれた。



図 2 UCD や TCD の学生と Prof. Gordon に対し、研究内容の説明を行う筆者。

指導教員確認欄	所属・職・氏名： 人獣共通感染症リサーチセンター 感染・免疫部門 教授 東 秀明 印
---------	---

※ 1 電子媒体を e-mail で国際連携推進室・リーディング大学院担当に提出するとともに、指導教員が押印した原本を国際連携推進室・リーディング大学院担当に提出して下さい。

提出先：国際連携推進室・リーディング大学院担当

内線：9545 e-mail: leading@vetmed.hokudai.ac.jp